GOGO 高校大学

つくる楽しさ 小学生と一緒に

女子美術大学 芸術学部
アート・デザイン表現学科
アートプロデュース表現領域
（東京都杉並区）

女子美術大学の学生が、夏休み中の小学生に工作を教えるワークショップに取り組んでいます。千葉県佐倉市との連携協定で、8年目の今年は8月22日に同市で開かれ、「アート」の世界の楽しさを子どもたちに伝えました。（前田基行）

土偶の仮面をつくる小学生にアドバイスする女子美術大学の学生（中央）＝どれも8月22日、千葉県佐倉市の市立中央公民館

女子美術大学の学生たち。最初にしりとりをしながら自己紹介しました

完成した土偶の仮面

光る土偶仮面のワークショップ

今年のテーマは「光る土偶仮面をつくろう！」です。女子美術大の芸術学部教授の南島隆先生が、「ドラえもん」の映画に登場する「目が光る土偶」にヒントを得て考えました。南島先生が、ドラえもんの顔にそっくりな縄文時代の土偶の写真を見せると、子どもたちも「似てる！」と大興奮です。

学生7人が前に並び、しりとりをしながら自己紹介して場を和ませ、ワークショップが始まりました。

市内の小学生の22人が参加し、6班に分かれました。「どうやってつくろうか」。子どもたちの緊張をほぐすように学生たちが話しかけます。「そこに小さな穴を空けてもかわいいと思うよ」「おしゃれだね」と声が弾みます。

子どもたちは段ボールの台紙に紙粘土をのせ、串や鉛筆で形を整えながら、パンダやネコ、クワガタをイメージした土偶の仮面をつくりあげました。「わかりやすくアドバイスしてもらって楽しかった」。子どもたちからはそんな感想が多く聞かれました。

女子美術大は2012年に佐倉市と連携協定を結びました。女子美術大の前身、女子美術学校で校長を務めた佐藤志津さん（1851～1919年）は、江戸時代に佐倉でオランダ医学を教えた順天堂の創設者、佐藤泰然さんの孫で、佐倉とは歴史的なつながりが深いからです。

ワークショップに参加した学生は、全員がアート・デザイン表現学科のアートプロデュース表現領域を専攻し、アートを通して楽しむことを学んでいます。

山下祐希奈さん（2年）は「ものをつくる楽しさを伝えたい」と思って参加しました。将来は舞台美術の制作などの仕事に就きたいと考えています。ワークショップでは「グイグイとこちらが誘導するのではなく、子どもたちの思いを尊重し、子どもたちがつくりたいものがつくれるようアドバイスすることを心がけました」。窪田梨那さん（2年）は「子どもたちの想像力は独創的ですごい！ 子どもの楽しむ姿を見て、自分たちがやっていることの楽しさを学び直すこともできます」。

南島先生は「芸術は決して難しいものではなく、だれもが楽しむもの。それを広めていこうという分野で学んでいる学生なので、実際に小学生たちと交流するワークショップは貴重な体験の場となっています」と話しています。